

当事者の体験

織田精悟氏自費出版 『夜明けを求めて』 より(著者の了解を得て抜粋掲載)

入院について

今から三十年前の精神科はひどいものでした。入院といっても、閉じ込めるだけ。タバコは一時間に一本という時間タバコ。看護人という人がいて、それは怖いものでした。今思えば精神科もずいぶん改善され、また色んなケアもあり、今になってなんとか統合失調症のアウトラインが見えるようになりました。

また、病気を抱えていても地域で暮らしていけるようになり、ずいぶん進歩だと思います。でも、もう入院はしたくありません。

作業所、デイケアについて

作業所、デイケアができたのは、ほんの少し前です。昔はそんなものはありませんでした。でも今では患者さんの生活リズムを作るため、また日中の居場所として重要な役目を果たしています。

だから今では、ちゃんと薬を飲んでリズムある生活をすれば、十分社会で暮らしていけると思います。

絵を描くこと

人間はある年齢になると、自分を何かで表現したいと思うものです。誌を書いたり本を書いたり、簡単なメモでもいいんです。



何か資格を取って社会に役立たせたい、歌を歌ってみんなに共感を求めるのもそうです。私はこういう者ですよ、というのを常に持っていたい。

それがたまたま私の場合絵を描くということになったのです。デイケアに行っても織田さんは絵を描く人なんだとみんなに知ってもらえます。友人も増えます。自己アピールというものでしょうか。

➤ そもそも私が絵を描くきっかけとなったのは、精神科病院の閉鎖病棟に入れられた時のことです。何もすることがない、何の楽しみもない、そんな時に売店に行ってノートと鉛筆を買ってきて窓から見える景色とか病棟内を描いていました。

それが私の人生を変える大きな出来事だったのです。

一人暮らしをして思うこと

確かに一人暮らしは大変です。寝る前にご飯のスイッチを忘れたら、朝ご飯が食べられません。トイレ掃除、風呂掃除、部屋の掃除。しかし、それがみんな絵を描く肥やしになっていると思うと苦になりません。訪問看護のヘルパーさんと楽しく会話が弾みます。もう一人暮らしを始めて三年、ようやく慣れました。

憂鬱になったらデイケアを活用しましょう。

日記から 2011年7月13日

いま私は五十八歳、北野の施設なら普通にやっつけそう。

継続は力なり。絵も文章も続ける。自分の頭の中には一点も曇りもなくさわやかに背伸びすることなく。

やっと灯りが見えた、自分の人生-----。明日からは朝食はカリフォルニアモーニングにして、食べようかな。

さっきも絵画一枚仕上げてきた。風が通り過ぎるようなさわやかな絵であった。

支配人が「みんなの北野だから自由に使っていいよ」と言ってくれる。全く自由。私が想像した以上に素晴らしい空間。



* 織田氏はこれまで40年近くの闘病、入退院を経た跡を淡々と手記に記して、描いた絵も挿入して去年、A5版47ページの本にまとめて出版しました。

編集後記

当事者・家族・支援者らからの想いが表現された紙面、広く伝えられたらと祈る。

映画「潜水服は蝶の夢を見る」はフランスのある雑誌編集長が脳梗塞で全身マヒ、意識・記憶はあるがコミュニケーションは瞬きのみという「閉じ込め症候群」になり、言語療法士の助けで20万回の瞬きで彼の本を出版した実話に基づく。映画を見て、人間はどのような手段でも人に伝えようとする心を持った。(伊東久雄)

当事者の声

このごろの夢

なかなか体調もすぐれない。季節によって波があるようで・・・早く病気を治したいです。西洋医学がダメなら東洋医学治療をためしてみたいです。

インターネットを使いこなせないと、いろんな情報を知ることが出来ないの、パソコンを習いたいです。

学生の頃は、怒られながら勉強おそわったので、こわさで勉強出来ませんでした。いつも泣いていました。

将来の夢 資金0でも経営者になる事です。夢は今叶わなくても言い続けると夢は叶うはず。幸せのたねをまくと幸せの花が咲きます。

ラジオを聴いたりするのが好きです。学生の頃体罰もイジメもされ、自分の意見も言えなくて笑顔も出来ませんでした。スポーツでご飯食べたかったですけど家の引越がありさせてもらえなかったです。ラジオは僕にとって親友です！。(ポストマン)

「ときめきは生きる喜び」

理事長 伊東久雄

やすらぎ工房へ行くと、黙々と作業している通所者、そばで支援する職員の表情にほんとうにほっとする。通所者に「あなたに会いに来た」というと、笑顔でうれしそう、やむなく病院や家で引きこもる当事者を想い、こうして辛い病・障害に耐えて社会の中で働ける幸せが伝わるようだ。クリスマス会で一人のメンバーが自作紙芝居と語呂合わせ一口芸をして拍手喝さい、少しときめいた誇らしげな彼の姿-----。

去年末、近くで開かれた人権問題研究集会である高校教師の平和学習の実践報告があり、沖縄普天間基地の現場に生徒が立った時、突如、戦闘機が爆音とともに低空で彼らの上を通過し、その衝撃は「教室での百万言より基地問題の真実を教えた」また東北被災地にも足を運び「ほんものにふれさせたい」と熱く語った。

そして、彼の情熱に応える生徒たちの生き生きと

長い闘病から絵を描くことに生きがいを見出したA君や、やすらぎ工房スタッフ、家族会を立ち上げた家族、NPO法人ボランティアの人、絵仲間たち、贈られたすばらしい花束など、私の個展での出会いの感激は忘れられない。

街のペットショップで、狭いケースに親から引き離されて閉じ込められて買い手(飼主)を待っている子犬の姿に接すると心痛む。多くの先進国ではこのようなペット売買は規制されている。道端の何気ない花もいまをせいいっぱい咲いているのち輝かせているのに！

生きている限り、何かを表現し伝え、伝えられて”ときめく”瞬間があるはずである。

病や障害があっても、できる限り生きる喜びを！



再生「やすらぎ工房」をめざして

施設長 宮本昭男

やすらぎ工房にお世話になって7ヶ月が経ちました。まだ、わからないことが多いのですが、何とか全体が見えるようになってきた感じがしています。

そのような中で、メンバーの方にとって、やすらぎ工房の存在意義は何なのかなど少し不遜なことを考えたりもしております。

やすらぎ工房が目指すこととして、メンバーの方が「安心して過ごせる場」そして「主体的にすごせる場」になることなどを掲げておりますが、果たしてそのような所になっているのかを検証していければと職員の皆とも話しております。

来年度から、少しずつではありますが、再生「やすらぎ工房」をめざして、見直しに向けて取り組んでいければと考えております。

・男性21名が利用し、1日平均では12.7人の利用となった。(4月例)
・女性2名が利用し、1日平均1.1人の利用となった。

1日平均利用者数(人)

1日12.9人が利用(前年比1.6人▲)
延利用者数の男女比率・・・15.5:1

年度	23	24	増減	男性	女性
4月	16.0	13.8	-2.2	12.7	2.1
5月	15.8	12.5	-3.3	11.5	2.0
6月	14.9	12.4	-2.5	11.5	2.0
7月	15.0	13.2	-1.8	12.5	2.0
8月	13.6	12.8	-0.8	12.3	2.0
9月	14.8	13.3	-1.5	12.4	2.0
10月	14.0	12.3	-1.7	11.6	2.0
11月	13.9	13.7	-0.2	13.0	2.0
12月	13.7	11.9	-1.8	11.2	1.0
1月	14.5	12.5	-2.0	11.8	1.0
2月	13.3	13.9	0.6	13.1	1.0
3月	14.4	0.0		0	0
合計	14.5	12.9	-1.6	12.1	1.7

2月まで

23年度 事業報告書、収支計算書等が閲覧できます。

www.hyogo-intercampus.ne.jp/v-hyogo/ → ひょうごNPO法人 →

または 県民ボランティア活動の広場

情報公開サイト

→ □三木市 (→ □保健・医療・福祉)



- 保健・医療・福祉を省略すれば、→ 三木市の全法人が検索できる。
- 兵庫県内の全法人が検索できる。

当事者の体験発表を聴いて

3/8北播磨自立支援協議会研修会～各市町の障害を持つ当事者7人の体験発表から～

知的障害のある57歳の男性は結婚し、作業所に通い金銭管理で助けられ「十分幸せ」という。同じハンディの高齢の夫婦は文字が読めないが、夫婦げんかもすると会場を笑わせた。うつ病の還暦過ぎた人はいま仲間がほしい、こづかいがほしいと明言、ミオパチー患者という日本で約100例の希少難病の青年は、不自由な体で難病者のグループ活動も披露した。

また、聴覚障害者は手話しか通じないコミュニケーションの悩みを語った。兄弟二人が精神疾患を患い、20年入院し自殺未遂もあった経験を話す43歳の人もいた。

病・障害とともに生きてきたそれぞれの苦しさ、健気さ、たくましさ、夢――そして彼らを支える若い支援者の姿に感動した。それぞれに、重荷を背負って歩んできたであ

一《家族の体験》一「息子の病から学んだこと」

●発病の時

私の息子は、大学3年の春頃から、食欲なく眠り続け、無気力、無感動の日々を送っていました。受診を拒み、薬を拒否し、不安と焦りと戸惑いで、どう対処すればいいのか、ただ途方に暮れる毎日でした。やっと医療につなげることが出来たのは、1年以上過ぎてからのこと。医師から病名を告知された時、失意と絶望で、過去を掘り起こし、自分を責めながら――。精神科医から百人に一人の割合で発病すると言われ、心がふるい立った当時を思い出します。

息子の病気をきっかけに何とか自立にむけてと、不安と焦りで永年勤めていた職場を退職、飲食店を開業したが、本人には負担が大きかった。病気の理解不足に反省し涙するばかりでした。

●出会い―「ほのぼの会」と「やすらぎ工房」

そんな中で、今から15年前病気の再発をきっかけに、三木保健所の家族教室があることを知り思い切って参加した。教室では”心の病”を持つ家族の人達との出会いがあり、この勉強会から次第に地域の中で社会の中で人々の理解と協力を得ながら、何とか居場所作りが出来ないかを考えるようになり、その為には家族会が必要不可欠ではないだろうか、保健所や関係機関の方々のお力を得て、平成10年8月21日、三木・吉川地区精神障害者家族会「ほのぼの会」を発足させることが出来ました。当初は、複数の家族で、バザー、啓発活動など必死に活動

軽自動車助成決定 7月納車

神戸やまぶき財団様に感謝!!

昨年9月、神戸やまぶき財団様(H24年設立・神戸市須磨区)の社会福祉助成金(第1回)に応募していたところ、このほど助成金交付の決定通知をいただきました。

助成金が交付される7月には悲願であった2台目の送迎車両(軽乗用車)を購入することができます。

現在1両(8人乗り)では、定員超過になると2便運行を余儀なくされ、利用者に時間的・身体的にも負担をかけていました。2台の車があれば、同時運行によって送迎で利用者にかかる負担が減るのに・・・という永年の思いが解消されます。

また、送迎のみならず行事など施設外へも積極的に活動の場を広げる力になることが期待され嬉しいかぎりです。メンバーさん職員一同大いに感謝し、納車の日を待ち望んでいます。(北上)



んぼ”も設立。改めて、社会参加の必要性を感じ、作業所作りをめざし、施設の見学、勉強会など保健所のアドバイスにより三木市の公的な場所をお借り出来る運びとなりました。

平成12年3月1日精神障害者小規模作業所「やすらぎ工房」が、こうして誕生しました。

●「生きていてよかった」社会へ

私が今日あるのは息子の障害のおかげだと考えたことがあります。永い療養生活を送っている息子の苦しみに思いを馳せ、親なきあとは、障害のある本人、家族にとって、生きていて良かったと思えるような差別・偏見のない社会であってほしい!

三木市人権尊重まちづくり条例は、この三木市をそのような町にするために作られたと考えています。根強い精神障害者に対する偏見は、知識、情報の不足と、直接触れ合った経験がないことが最大の原因、温床であり偏ったイメージを、マスコミ報道が拍車をかけているように思います。今、ようやく精神医療や社会資源が少し整備されつつあるようですが、家族の高齢が進み年を重ねながら、病と仲よくつき合っているのが現実です。

又この度、精神疾患が五大疾患に認められたことは、これまでの家族会活動の大きな成果だと思っております。

この国に生まれてよかったと思えるような福祉社会の実現に期待したいものです。

3・11から2年 被災現地の想い

3月11日から2年を迎える。「もう2年」。という思いと「まだ2年」という思いがある。兵庫では阪神淡路大震災を経験しているだけに、ほかの地域よりは風化する度合いは低いと思うが、確実に風化は進んでいると思う。私自身、実家が被災、全壊ということもあり、まさに他人事ではないが、それでもなにもできずにいる自分がいる。

何度か東北へ電話相談の手伝いに行った。東北の人たちは寡黙で、我慢強いと言われている。確かにそんな一面もあるかも知れないが、そうしたイメージが先行して、何も言えずにいる怒りを吐き出す人もいる。「しんぼう強いとか、礼儀正しいとか何度も言われるとまるで強制されているようで言えなくなる」

心の問題を抱えている人からの電話も多かった。マスコミでは震災や原発事故にあってからの「こころのケア」にスポットを当てて報道することが多いが、実はもともと、病気を抱えていた方からの相談が多いのだ。環境や状況が変わることで不安になり、ますます症状が重くなる人、「さびしくてさびしくて」と言い続ける人、病院やグループホームなどケアを受けられる場にいる人でさえ、なかなか不安を語れないと訴えてくる人もいた。

震災、津波や原発事故など災害は、だれにでも襲ってくる。しかし、その後の必要なケアは、人によってさまざま。復興格差と言われるが、声の小さい、弱い立場の人が置いて行かれることのないよう、日ごろから体制を整えておくことが必要だろう。それは、ひいては、日常の暮らしがどれだけ孤立せずに、生きていけるような体制がとられているかどうか。東北の春はまだまだ遠いが、忘れずに見守りながら、自分のできることを続けていきたいと思う。

「手を抜く」「先延し」もよい

ネットで見たとニュースなのですが、あえてダラダラすること、少し手を抜くことが睡眠と同じくらい脳にとって大切なのだそうです。「退く」という状態は想像力をアップさせ、「注意散漫」は、既成概念にとらわれない考えを生むそうです。そして「先延ばし」は、そうすることにより十分検討する時間をもつことにもなるそうです。

社会の流れもせかせかしている今日この頃。あれもなければ、これもしなければと時間や周りに追われるのではなく、少し立ち止まり、ゆっくりとリラックスして気持ちを休め、自由に考え、日々を楽しむ気持ちを作っていけたらいいな、、、、と思います。頑張りすぎず時には力を抜いてリラックスしましょう!!

やすらぎ工房と私

初めてやすらぎ工房を訪れた時、まだ採用になるかも決まっていなかったのに一抹の不安を覚えた私。。。はばたきの施設を指差し『あっちの建物で作業するんですか?』と質問したことは内緒です。無事採用され、やすらぎ工房の仲間入りをして2月で5ヵ月目に入りました。

え?こんな狭い所で大丈夫?とか思ったことなど忘れ去り、やすらぎ工房と言う場所は私にとってかけがえのない場所になりました。毎日大騒ぎしている私を温かい目で見守ってくれるメンバーさん。何かしらやらかす私をこれまた暖かい目で見守ってくれる職員の皆、やすらぎ工房の暖かい目のお陰でとても楽しい毎日を送っています。

これからもドタバタと騒がしい私ですがよろしくお願いたします。

合同会社アイグラー ポイントアート 障がい者のためのヘルプステーション 開設

小松輝子さん(青山1丁目・当法人理事)は、2月1日合同会社を設立し、障害者のためのヘルプステーション事業を開始しました。“一度の人生そこがポイント、我が人生の芸術家そこがアート”の想いで、ポイントアートを事業者名にされています。

- 事業内容は
- ・訪問介護(要介護、要支援)
 - ・障害者の居宅介護、重度訪問介護、同行援護、行動援護、移動支援
 - ・指定相談、児童指定相談

ケアプランの作成から、成年後見受任、自宅でのヘルプ、移動時のヘルプを児童、老人、身体、知的、精神すべての方を対象にヘルプできます。

老人では、認知症の方に主に関わる予定にしています。

スタッフは
社会福祉士、介護福祉士、精神保健福祉士、保育士、訪問介護支援相談員、相談支援専門員の有資格者6名で、みんなが生き生きと生活できるようお手伝いします。

〒673-0521 三木市志染町青山1-5-13
☎ 0794-88-8812 ・ FAX 0794-88-8814